

新潟県

- ◆ 豪雪地では珍しいブルーベリー栽培に挑戦
観光農園を開園し、地域飲食店とのコラボにも挑む
関遼 (Maries Farm) (魚沼市)  p. 1
- ◆ 女性一人でハウスを新設し、園芸に取り組む自身の将来を見据えながら、
営農の継続を
大倉憂里香 (村上市)  p. 2
- ◆ いちご栽培のため、稲作を減らし省力化
将来は農園にキッチンカーを導入したい
渡辺健史 (渡辺農園) (上越市)  p. 3
- ◆ 新規でも取り組みやすい「いちじくのコンテナ栽培」
多品種栽培による販売形態の多様化も
堀川紀子 (ほんのり農園) (新発田市)  p. 4
- ◆ ひだか農園のファン作りを大切にしていきたい
斎藤日高 (ひだか農園) (新潟市)  p. 5
- ◆ 農事組合法人を立ち上げ地域の稲作を担う一方で、個人でいちごを栽培し、
安定した収入を確保
真嶋智広 (新発田市)  p. 6
- ◆ 農業を楽しみながら、地域も巻き込む
「自然薯を収穫した時の嬉しさが忘れられない」
長谷川正則 (阿賀町)  p. 7
- ◆ 地域の園芸作物を学び、多品目栽培に挑戦「自身の作物を消費者に喜んで
もらえるのが励みに」
金崎優 (小千谷市)  p. 8
- ◆ 排水対策の徹底と販売の工夫で水田転作たまねぎの収益を向上
加藤健太 (株式会社アグリード越後) (柏崎市)  p. 9
- ◆ ユリと山菜を組み合わせ豪雪地での通年園芸を実践
渡辺昌幸 (魚沼市)  p. 10
- ◆ 地元JA、関係機関と協議し、生産・販売に有利な地域の推奨品目を導入
川上譲一 (胎内市)  p. 11
- ◆ 収穫時期が重複しない園芸作物を組み合わせ栽培年間を通じて作業量を平
準化
駒澤一雄 (聖籠町)  p. 12
- ◆ さといも栽培の機械化を進めるとともに、地域の生産者グループで全国に
「帛乙女」をPR
浅井久美雄 (五泉園芸組織連絡協議会：五泉市)  p. 13

- ◆ 水稲、えだまめ、さつまいもの複合経営で、地域と連携して規模を拡大
丸山雄太郎（弥彦村）  p. 14
- ◆ 多様な果樹、いちごを栽培し、フルーツカフェと観光農園を開設
有限会社齋藤農園 齋藤真一郎（佐渡市）  p. 15
- ◆ 大型トラクターで作業を効率化年俸制で従業員を通年雇用
久保和喜（長岡市）  p. 16
- ◆ マーケットを注視しながら年間栽培計画を策定 需要を望める時期にピンポイント栽培
本間茂雄（関川村）  p. 17
- ◆ 園芸作物の栽培品目を見直し年間を通じて平準化した作業体系とし安定収入の確保へ
株式会社平野農園（胎内市）  p. 18
- ◆ ブランドいちご「越後姫」の栽培技術確立に寄与販路拡大を推進し、産地発展に貢献
本間正司（新発田市）  p. 19
- ◆ 葉たばこの廃作農地を借受け地域でさといも栽培 「砂里芋」で1億円産地を達成
小林八寿夫（聖籠町）  p. 20

豪雪地では珍しいブルーベリー栽培に挑戦 観光農園を開園し、地域飲食店とのコラボにも挑む

マリーズ ファーム
関 遼 (Maries Farm) (魚沼市)



↑マリーズファームの
ホームページはこちら

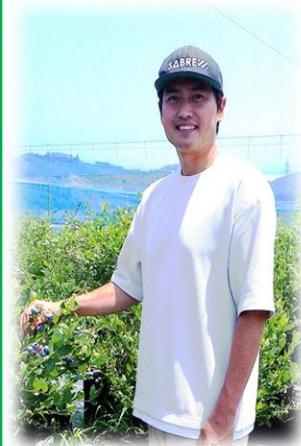
主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 実家は稲作の兼業農家で、子供の頃から農作業を手伝っていた。
- ◆ 大学在学中から、いずれは就農することを考えており、卒業後はサラリーマンとして働きながら、栽培品目を含め就農後の経営について検討していた。
- ◆ 水稲も検討したが、投資に費用がかかるため、園芸をやることに決め、どうせなら人がやっていないことをやろうと考えた。
- ◆ ブルーベリー栽培は、比較的手間や設備投資の費用がかからないことを知り、取り組むことにした。
- ◆ 2021年に自宅裏でコンテナ栽培を開始した。その傍ら実家の水田30aを観光農園のために整備し、同年7月に観光農園をスタートした。



ブルーベリー園と関さん

これまでの課題に対する対応等

- ◆ 就農にあたっては、新規就農者支援事業などを活用した。
- ◆ 栽培当初は、病害虫など技術面でわからないことだらけだったが、実際にやりながら自身で調べ、1つ1つ解決していった。
- ◆ 現在は、販路と認知度アップが課題である。地域の飲食店等に、ブルーベリーとのコラボ商品の提案をして、商品化した。それを地域の人にも食べてもらい、認知度アップにつなげたいと思う。

今後の展望等

- ◆ 収量の安定と販路を拡大し、規模拡大につなげたい。
- ◆ 地域で栽培する仲間を増やしたい。仲間が増えれば収量が増え販路拡大も進めやすくなる。
- ◆ キッチンカーで飲み物等の提供を考えており、農園の集客をもっと増やしたい。



たわわに実る
ブルーベリー

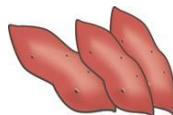
いちご栽培のため、稲作を減らし省力化 将来は農園にキッチンカーを導入したい

渡辺 健史（渡辺農園）（上越市）



↑渡辺農園のホームページはこちら

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 実家が10haの水稲と野菜、切花の専業農家だったが、自身は農家になる気はなかったものの、漠然と農業大学校に進学した。
- ◆ 大学時代にファームステイの研修があり、十日町市の農業法人でいちご栽培を学んだ。その法人はレストランや豆腐屋もやっており、アイデア、努力次第で農業経営の幅が広がるのが面白いと思い、農業をやってみることにした。
- ◆ 施設ではトルコギキョウや食用花、冬作でアスパラ菜等を栽培し、露地では、さつまいも、かぼちゃ、ピーマンなどを栽培している。

これまでの課題に対する対応等

- ◆ いちご栽培には、施設などの初期費用が掛かることや、栽培技術もないことから両親や近所の水稲農家に反対された。
- ◆ 初期費用は、新規就農の補助金（独立支援）を利用し、施設1棟からスタートした。現在、4棟になり、ようやく軌道に乗ってきた。
- ◆ いちご栽培に集中するため、水稲の面積を1.5haに減らし省力化を図った。
- ◆ お菓子やジェラートなどは、一部自身の加工所で作っているが、栽培との両立に苦慮している。



渡辺さんご家族

今後の展望等

- ◆ 施設内のCO2や温度、湿度の管理をITで行ったり、閉鎖型施設で作るいちごを提供したい。
- ◆ また、農園にキッチンカーを置いて、お客様に美味しいいちごを早く提供し、喜んでもらえる時間を増やしたい。



食べれるお花も栽培し、いちごとともにお菓子に

新規でも取り組みやすい「いちじくのコンテナ栽培」 多品種栽培による販売形態の多様化も

堀川 紀子（ほんのり農園）（新発田市）



↑ほんのり農園のホームページはこちら

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 結婚後、時間に融通が利き、育児、家庭と仕事の両立ができる仕事を考え、大学や大学院で土壌を学んだことを生かし、農業をやろうと決めた。
- ◆ 市内の農業法人で3年間、りんご、ぶどう、ももなどの果樹栽培を学び、自身が興味を持っていた「いちじくのコンテナ栽培」を試験的に導入してもらい勉強した。
- ◆ いちじくは消費者にとっても人気があり、栽培でも他の作物と比べ、大型機械の導入をすることなく、女性一人でも栽培管理できることから導入を決めた。



堀川紀子さん

これまでの課題に対する対応等

- ◆ 農地は農業委員会から複数を紹介してもらった。
- ◆ いちじくのコンテナ栽培には水質と水源の確保と電源が必須なので、地域の方のアドバイスを踏まえて現在の農地を借りた。
- ◆ 栽培設備は、JA新潟農業応援ファンドや市の新規就農者定着促進事業を活用した。
- ◆ いちじくの害虫であるアザミウマは、実が変質して取引に重大なリスクを伴うので、対策に白い防虫網やシートを使用している。
- ◆ 出荷先は、JA直売所、道の駅や圃場での直売を行っている。
- ◆ いちじく生産者全体の品質向上に伴った販売価格の上昇と、それに対する消費者の理解が得られたら良いと思う。



きれいに色づいたいちじく

今後の展望等

- ◆ 顔の見える販売を心がけ、何よりも地域の人に喜ばれる農園にしていきたい。
- ◆ いちじくの加工や他の果樹栽培も視野に入れながら、農福連携にも取り組みたい。
- ◆ 「いちじくのコンテナ栽培」を環境負荷の少ない、誰にでも使える栽培技術にしていきたい。

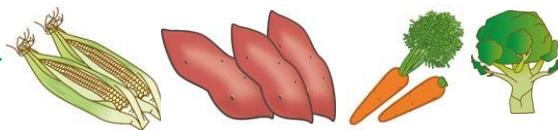
ひだか農園のファン作りを大切にしていきたい

齋藤 日高（ひだか農園）（新潟市）



↑ひだか農園のホームページはこちら

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 自身は非農家出身であったが、大学時代、全国の農家へのホームステイをきっかけに、農業が楽しくなり農業に目覚めた。
- ◆ 大学卒業後は、野菜市場を学ぶため都内のスーパーに就職して4年間務め退職し、その後、群馬県の知り合いの農家で2年間研修した。
- ◆ 新潟県へ戻り、更に2年間農家で研修し、2014年に新規就農した。
- ◆ 研修先で栽培していたカラフル人参を自身も栽培したいと思い、人参栽培から始めた。



とうもろこし畑と齋藤さん

これまでの課題に対する対応等

- ◆ 就農にあたっては、新規就農者支援事業などを活用した。
- ◆ 就農は単独でスタートし、技術も未熟、人手も売場もない状態だった。農家で研修したからといって、スムーズにいく訳ではない。技術はSNSを活用したり、農家仲間から聞くなどして参考にした。
- ◆ 比較的区画が隣接した農地を、研修先の農家やそこに出入りの業者、自治体のおかげで借りることができた。
- ◆ 人手が欲しい。人を雇用していたときは、作業の分担や新しい形態での取り組みなどのアイデアをもらい助かった。

今後の展望等

- ◆ 販売エリアを新潟市内にしぼり、ひだか農園のファン作りを大切にしていきたい。
- ◆ 今後もひだか農園の代名詞として、カラフル人参の栽培を継続していく。
- ◆ 今年新たに、家庭菜園的に野菜作りを体験できる取り組みを始めたので、更に拡充していきたい。

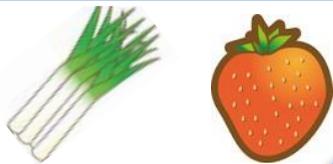


やさいの栽培体験

女性一人でハウスを新設し、園芸に取り組む 自身の将来を見据えながら、営農の継続を

大倉 憂里香 (村上市)

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 農業大学校でトマトを専攻、自身の育てたトマトを「おいしい」と言われ、園芸に興味があった。
- ◆ 卒業後、稲作農家の父親の支えになるべく実家に戻り、令和元年に就農。父親と経営を分離し、新たに園芸を開始した。
- ◆ 幼い頃から農作業を手伝うことが好きで就農に抵抗はなかった。
- ◆ 現在は、露地でねぎ（春・秋）、オータムポエムを栽培するとともに、ハウスを新設し、いちごを栽培している。



いちごハウス内の大倉憂里香さん



これまでの課題に対する対応

- ◆ ねぎは天候の影響を受けやすく、特に近年は品質・収量とも安定しない。また、全量JA出荷だが価格も安定しない。
- ◆ いちごは暖房費の高騰が経営を圧迫している。
- ◆ 園芸を始める方は、畑の土質が製品の出来の善し悪しに直結することから、その畑の土質が栽培品目に適しているか否かのチェックをしてほしい。自身は就農当初取り組んだトマトがうまく行かなかった。

今後の展望等

- ◆ 良質の製品を提供すればリピータになってもらえることから、さらに栽培技術を磨きたい。
- ◆ 今後、結婚・出産・育児で農業から離れなければならない局面があると思うが、どう農業を継続していけばいいか、考えていく必要がある。



ねぎ収穫機とねぎ畑

(令和6年2月)

農事組合法人を立ち上げ地域の稲作を担う一方で、 個人でいちごを栽培し、安定した収入を確保

真嶋 智広 (新発田市)

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 実家は稲作とねぎの複合経営だったが、大学卒業後に家を継ぐか農業関係企業に就職しようか迷っていた。
- ◆ 卒業間際に、オランダで1年間の園芸研修があることを知り参加した。帰国後、平成15年に実家に就農した。
- ◆ ねぎ以外に冬場の収入源としてハウス栽培をしようと考え、近隣でいちごが産地になっていたことから、現在、8棟(26a)のハウスでいちごを栽培している。
- ◆ 一方で、地域の水田農業を担う農事組合法人を立ち上げ、農地(34ha)を集約。代表として稲作に取り組む。



真嶋智広さん

これまでの課題に対する対応

- ◆ 県のリース事業を活用してハウスを整備したが、初期投資が大きく、償還を終えるまでは経営が厳しかった。
- ◆ いちごの栽培方法は、隣の集落の「越後姫の育ての親」と言われる農業者から学んだ。ねぎ栽培についても指導を受けた。
- ◆ 肥料、資材、燃油が高騰しているため、コストを下げつつ収量を上げられるよう工夫してきたが、ハウス栽培で燃油をあまり使わずに栽培できるかを試している。
- ◆ 稲作は法人、園芸は個人と経営を別にしたことで、どちらも疎かにせず取り組んでいる。自身の収入の多角化・安定につながっている。

今後の展望等

- ◆ 稲作については、今後地域で離農者が増えても農地を引き受けられるよう、農事組合法人でスマート農機や大型機械の導入を進めたい。今年から始めた稲WCSも、さらに増やしていきたい。
- ◆ 園芸については、現在、研修生を地元から受け入れているが、今後海外からも受け入れたい。



ズラッと並んだいちごハウス

(令和6年2月)

農業を楽しみながら、地域も巻き込む 「自然薯を収穫した時の嬉しさが忘れられない」

長谷川 正則 (阿賀町)

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 会社に勤めながら兼業で稲作をしていたが、いずれは農業を専業にしたいと考えていた。
- ◆ コロナ禍で勤務先が倒産した際、阿賀町の新規就農者支援の対象が55歳までと知り、支援対象になるうちにと、令和3年に52歳で専業農家となった。
- ◆ 水稲のほか、アスパラ、自然薯、こんにやく芋、にんじん（秋、雪下）を栽培している。



自然薯を収穫する
長谷川正則さん

これまでの課題に対する対応

- ◆ 稲作のみでは経営が厳しいので園芸との複合経営に取り組んだ。
- ◆ 自然薯は地元の特産品で自身でも栽培したいと思っていた。こんにやく芋は鳥獣被害が少ないと普及センターに勧められた。栽培技術は、センターやJA、地域内外の農業者に教えてもらった。
- ◆ こんにやく芋は、近隣で栽培しておらずJAの取扱いもなかったもので、長岡市のこんにやく製造会社に出荷した。地域の特産物にしたいとJAに話したところ、他の農家でもこんにやく芋の栽培が始まった。
- ◆ 初めて自然薯を収穫した時の嬉しさが忘れられない。栽培には苦勞も多いが、自身が楽しむことが大事だと思う。

今後の展望等

- ◆ 販路の拡大が課題。県の事業に応募し、重点支援対象者に選定されたので、コーディネーターの支援を受けながら、販路について学び広げていきたい。
- ◆ 自然薯の栽培面積を広げ、売上を増やしたい。自分だけでなく地域産物としても盛り上げたい。

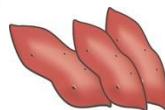
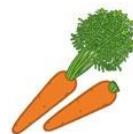


獣害防除のため電気柵は必須

地域の園芸作物を学び、多品目栽培に挑戦 「自身の作物を消費者に喜んでもらえるのが励みに」

金崎 優 (小千谷市)

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 実家が稲作の兼業農家。民間企業に就職したが、父から承継する気があるか問われ、農業をやろうと実家に戻ってきた。
- ◆ 水稻だけでは経営が厳しいと考え、園芸に取り組む農業法人で2年間研修した。小千谷は園芸の組合があるなど園芸が盛ん。地域に相談できる人がいること、栽培マニュアルがあること、研修先で学んだことが活かせることから、園芸に取り組み始めた。
- ◆ メロン、小玉スイカ、カリフラワー、にんじん、さつまいもと多品目を栽培している。自身は園芸、父が稲作と経営を別に行っているが、繁忙期には稲作も手伝う。

これまでの課題に対する対応

- ◆ 当初は失敗もあったが、実際に自分でやりながら栽培技術を習得した。見かねて指導してくれる先輩もいて非常に助かった。
- ◆ JAや国の補助金を活用しながら機械を導入し作業を軽減している。使えそうな道具をネットで探して試してみるなど、作業効率を上げるため、試行錯誤している。
- ◆ 園芸は、自分が作った作物を消費者に手に取ってもらい喜んでもらえるのが、励みになる。



金崎優さん

今後の展望等

- ◆ 通年作業の確保や人件費など課題があるが、雇用を検討したい。
- ◆ 稲作との経営統合がこれからの課題。いずれは法人化も視野に入れている。
- ◆ 栽培品目では、高値取引が見込めるメロンの栽培を増やしたい。

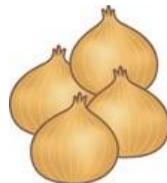


色々な機械を購入し試している

排水対策の徹底と販売の工夫で 水田転作たまねぎの収益を向上

加藤 健太（株式会社アグリード越後）（柏崎市）

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 稲作農家の祖父の後を継ぎ、平成26年に就農した。
- ◆ 粘土質が強く、稲作には向かない圃場での栽培品目をJAに相談したところ、たまねぎを提案され、平成30年から水田転作のたまねぎ栽培に取り組む。
- ◆ 同年、経営を法人化。
- ◆ 水稲20ha、大豆2ha、たまねぎ1haを栽培。



（株）アグリード越後
代表の加藤健太さん

これまでの課題に対する対応

- ◆ たまねぎ栽培の初年は、期待していたより不作で、利益が想定した額を大幅に下回ってしまった。
- ◆ 翌年からは、より排水性の良いほ場に代えるとともに暗きよ・明きよの排水対策をしっかりと講じたことで、収量・品質が向上した。また、販路も直売所や飲食店への直接販売にシフトしたところ、利益も増加した。
- ◆ 令和元年からは、女性役職員の発案で、たまねぎ収穫体験イベントを開催している。具体的には「10kg入り収穫用ネットを購入し、たまねぎを詰め放題」という内容で、お客様は楽しみながら割安にたまねぎを購入できる一方、当社は収穫の手間、調製や販売に必要な人件費が削減できるという、双方にメリットがある取組。

今後の展望等

- ◆ 農業者の高齢化は自社の地域でも深刻な問題。今後自社に農地が集まってくることが想定されることから、作期分散を念頭に多様な品目を導入し、地域農業の受け皿として体制を整えていきたい。



育苗ハウスの前で

ユリと山菜を組み合わせ 豪雪地での通年園芸を实践

渡辺 昌幸 (魚沼市)

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 会社勤めをしていたが、自分で仕事を回していけるといって農業に魅力を感じ、実家が花き農家であったこともあり、平成11年に就農した。
- ◆ 就農後、それまでの露地栽培に加え、ハウス栽培（ユリ8a×春秋2回、ふきのとう40a）を取り入れた。現在、ユリ、シャクヤク、ふきのとうを栽培している。



渡辺昌幸さん

これまでの課題に対する対応

- ◆ 当初はとまどうことも多かったが、地元の花き園芸組合の青年部に参加し、他の農業者などから刺激を得たり、他産地を視察したりして、少しずつ技術を習得した。普及センターや先輩農業者などからもたくさん助けてもらった。
- ◆ ユリは、ハウス栽培で春と秋に出荷し、露地栽培で7月から11月まで出荷。12月から4月はふきのとうの出荷作業を行う。
- ◆ ユリはデリケートなため、出荷はすべて手作業。品質低下の懸念から、機械の導入は考えていない。
- ◆ 繁忙期はアルバイトを雇用しているが、人により得手不得手があり、仕事の差配が難しい。高齢化も進んでいるが、長期の経験がないと難しい作業が多く、新規の雇用が課題。

今後の展望等

- ◆ 球根価格が高騰している一方で花の市場価格は厳しいが、1日でも長くこの仕事を続けていきたいし、1円でも高く1本でも多く買ってもらいたい。
- ◆ 組合では、後継者のいない経営者に、新規就農者への継承に取り組んでいる。努力次第で収益を上げられるので、関心がある人には挑戦してほしい。

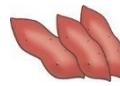


ユリのほ場

地元 J A、関係機関と協議し、 生産・販売に有利な地域の推奨品目を導入

川上 譲一（胎内市）

主な園芸作物



園芸作物導入の経緯等

- ◆ 県外の農業大学を卒業後、1年間オランダで施設園芸を学び平成4年に親元就農。
- ◆ 就農当時は、水稻、葉たばこのほかに園芸作物（だいこん、ごぼう、切り花）を栽培。以降、栽培品目を拡大（さつまいも、加工用にんじん、秋冬生食にんじん）した。
- ◆ 令和3年に葉たばこを廃作し、加工用だいこん、ブロッコリー、春夏生食にんじんを追加した。
- ◆ 冬期は、ハウスで切り花（アイリス、チューリップ）を栽培している。

※イラストはイメージ



川上譲一さん
との意見交換

これまでの課題に対する対応

- ◆ 葉たばこの廃作にあたって、地元 J A や関係機関と葉たばこに代わる栽培品目を検討し、販売に有利な地域の推奨品目である加工用だいこん、ブロッコリー、春夏生食にんじんの栽培を開始した。
- ◆ 加工用だいこんへの転換には、県の園芸拡大農地フル活用事業を活用し、地域の農業者と共同でだいこん収穫作業機械を導入し作業の軽減を図った。
- ◆ 加工用だいこんは地元の漬物会社へ、また、加工用にんじんは大手の野菜ジュース会社へ、それぞれ J A を介して販売している。
- ◆ 冬期は、ハウスで切り花を生産するとともに、秋に収穫したさつまいもを一定期間貯蔵後、双方とも J A へ出荷し収入確保している。

今後の展望等

- ◆ 地域と連携し、園芸作物の団地化や I C T 等の活用により作業の軽減を図りたい。
- ◆ J A と連携し G A P 認証の取得を検討したい。



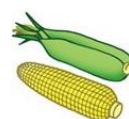
砂丘畑で生育中の
さつまいも

（令和5年3月）

収穫時期が重複しない園芸作物を組み合わせる栽培 年間を通じて作業量を平準化

駒澤 一雄（聖籠町）

主な園芸作物



園芸作物導入の経緯等

- ◆ 昭和53年、葉たばこ、園芸作物、水稻の複合経営を営む実家に親元就農した。
- ◆ 平成元年、葉たばこを廃作し、さくらんぼと根菜類（さといも、ごぼう）の生産に切り替えた。
- ◆ 平成13年、冬期に作業できるいちごのハウス栽培を開始した。

※イラストはイメージ



いちごの手入れをする駒澤一雄さん

これまでの課題に対する対応

- ◆ 良質な農産物生産には、土づくりが基本。緑肥用とうもろこしを植え、すき込むことにより連作障害対策、せん虫抑制対策を講じるとともに、緑肥に併せて堆肥を施用している。
- ◆ 収穫時期が重複しない園芸作物を計画的に組み合わせる栽培することで、年間を通じて作業量を平準化している。水稻に加え、ハウスいちご（2月～6月）、さくらんぼ（5月～6月）、とうもろこし（6月～7月）、さといも、ごぼう（11月～3月）を栽培している。
- ◆ さといもはJAに出荷。ごぼう、いちご、とうもろこしはJA出荷と直接販売している。
- ◆ さくらんぼについては、直接販売とJA出荷に加え、さくらんぼの木のオーナー制も導入し、消費者と直接契約している。

今後の展望等

- ◆ 費用対効果を分析しつつスマート農機を導入し、作業を軽減したい。
- ◆ 圃場整備には2割の園芸導入が要件となる。園芸作物が定着するよう、新たに園芸作物の栽培を始める農業者に栽培技術を指導し、地域農業を活性化させたい。



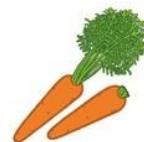
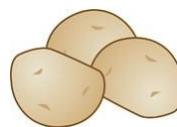
収穫を終えたさくらんぼの木

（令和5年3月）

さといも栽培の機械化を進めるとともに、 地域の生産者グループで全国に「帛乙女」をPR

浅井 久美雄（五泉園芸組織連絡協議会）（五泉市）

主な園芸作物



園芸作物導入の経緯等

- ◆ 昭和56年、水稻と野菜、花きの複合経営を営む実家に親元就農。
- ◆ 昭和57年に園芸の地域連絡会（現在の園芸組織連絡協議会）が結成され、令和4年度から会長を務めている。
- ◆ この間、五泉産さといもは「帛乙女」と命名・商標登録され、地域を挙げてブランド化に取り組んできた。
- ◆ 現在は、水稻15ha、さといも80a、ばれいしょ40a、にんじん20aを栽培。

※イラストはイメージ



さといもの農機具と
浅井久美雄さん

これまでの課題に対する対応

- ◆ さといもは連作障害が発生しやすいことが課題。このため、他の作物とのローテーション栽培やごぼう生産者との圃場交換により連作を避け、収量の確保と品質の向上を図っている。
- ◆ 定植、土寄せ、収穫（掘り起こし）に機械を活用し、作業を効率化。一方、収穫後のさといもの調製は、傷をつけないよう細心の注意を払いながら手作業で行う。秋から翌春まで調製作業と出荷が続く。
- ◆ 地域連絡会では、首都圏等へ大鍋を持ち込み芋煮会を開催するなどして、五泉産さといもの知名度向上に取り組んできた。現在も連絡協議会の会長として、帛乙女のPRのために全国を訪問している。

今後の展望等

- ◆ 帛乙女を原材料とした焼酎が酒造会社により商品化されたが、さらに、スイーツ（アイスやヨーグルト等）の原材料として帛乙女を販売したい。
- ◆ 市場から帛乙女を増産してほしいとの要望が多いので、担い手の確保と作付規模の拡大を進め、帛乙女を全国に届けたい。



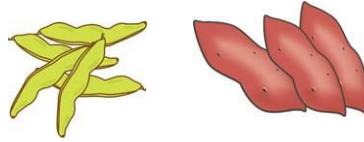
手前：定植機、後方：土寄せ機

（令和5年3月）

水稲、えだまめ、さつまいもの複合経営で、地域と連携して規模を拡大

丸山 雄太郎（弥彦村）

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 平成24年、水稲の兼業農家だった実家に就農。水稲だけでは収入に限られるため、えだまめとの複合経営を開始した。
- ◆ 現在は水稲5ha、えだまめ（弥彦むすめ）を2.5ha作付。えだまめの販売はJA出荷が7割。その他は地元旅館や消費者等に直接販売している。
- ◆ 弥彦村野菜部会副会長も務め、村が特産化を計画しているさつまいもの生産も少量だが開始した。



えだまめ畑と丸山雄太郎さん



えだまめ選別機を操作

これまでの課題に対する対応

- ◆ 「地元で若い人が頑張るなら」と、周囲の農業者が技術指導等で協力をしてくれ、徐々にではあるが、規模を拡大できた。
- ◆ えだまめも含めた弥彦の魅力を発信するため、You Tubeチャンネル（YAHIKOFAN）を立ち上げた。

今後の展望等

- ◆ 村が設置したえだまめ選果場の活用も視野に入れて、5ha程度まで規模拡大を目指す。
- ◆ 村が特産化を計画しているさつまいもの生産も徐々に規模拡大し、収益アップを目指す。



ほ場で育つえだまめ

多様な果樹、いちごを栽培し、 フルーツカフェと観光農園を開設

有限会社齋藤農園 齋藤 真一郎（佐渡市）

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 平成5年、JAを退職し、水稻・柿の複合経営を営む実家に就農。
- ◆ 平成8年に経営の幅を広げるためハウスを導入し、いちご（越後姫）の生産を開始。平成11年に地域農業の中核となるべく法人化。
- ◆ 平成27年に農園の果物をジュースや氷菓で楽しめるフルーツカフェを開設するとともに、いちごの観光農園を開始。
- ◆ 現在は、水稻栽培と並行し、露地でおけさ柿のほか、もも（ネクタリン）とりんご、ハウスでぶどう（シャインマスカット）といちごをそれぞれ栽培。



いちごを収穫する
齋藤真一郎さん

これまでの課題に対する対応

- ◆ 園芸作物の規模拡大には、労働力の確保が課題であったが、地元の高齢者に作業してもらうことで対応した。また、福祉事業所を通じ、農福連携にも取り組んでいる。
- ◆ 地域農業の後継者育成のため、農業研修生を受け入れ、園芸作物の栽培技術の指導を行っている。



たわわに実るおけさ柿

今後の展望等

- ◆ 佐渡島内の柿の生産量が減少していく中、産地を守るべく地域ぐるみでGI登録を目指す。
- ◆ 観光農園型の施設栽培を規模拡大し、観光客がおけさ柿をもぎ取り、持ち帰り、自身で渋抜きを行うスローフードを意識した農園を目指す。
- ◆ ハウスにおける栽培管理にスマート農機（環境制御装置等）を導入し、労働力の軽減を図りたい。



いちご狩りにも適した
高床ハウス

大型トラクターで作業を効率化 年俸制で従業員を通年雇用

久保 和喜（長岡市）

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 農業者大学校に在学中、研修先の他県の小ねぎ農家が年間1億円を売り上げていることを知り、自分も園芸で1億円を稼ぎたいと決意した。
- ◆ 平成20年、水稻中心だった実家に親元就農し、ハウスでの小ねぎ栽培を開始。以降、園芸作物の作付を拡大。
- ◆ 現在は、水稻16ha、大豆2haのほか、露地（約10ha）でえだまめとその後作でキャベツ、長ねぎ等を栽培。また、ハウス（10棟：30a）で、小ねぎ、トマト、キュウリ、アスパラ菜を栽培している。



ハウスの中の
久保和喜さん

これまでの課題に対する対応

- ◆ 水稻栽培と園芸の両方に使える大型トラクターを導入。ロータリーを使わないプラウでの耕耘やレーザーレベラーによる均平、肥料・農薬散布、畝立て、マルチ張りなどにトラクターをフル活用し、作業を効率化するとともに安定した収穫量を確保。
- ◆ 肥料価格の高騰に対処するため、肥料メーカーと相談しながら、輸入業者と直接価格等を交渉。
- ◆ 出荷時の梱包を段ボールから鉄コンテナに変更し、資材費等の削減に努めている。
- ◆ 家族以外に3名を通年雇用。冬場の施設栽培にはコストがかかるため、1～3月の間は栽培をせず、そのぶん繁忙期に長く働いてもらっている。給料を年俸制とし、冬場も従業員が生活に困らないようにしている。

今後の展望等

- ◆ 地域に適した園芸作物を導入し規模拡大を目指す。
- ◆ 今年度導入した栽培管理システムを活用して、生産コストを軽減し収益を上げたい。
- ◆ 新規就農を目指す研修生を受け入れ、農業技術を指導し、地域に新規就農者を増やしたい。



外国製130馬力の
トラクター

マーケットを注視しながら年間栽培計画を策定 需要を望める時期にピンポイント栽培

本間 茂雄（関川村）

主な園芸作物



※イラストはイメージ



芽出し中のユリの球根



植え付けした球根

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 農業高校を卒業後、会社に勤めながら兼業農家を営んでいたが、地域の担い手を目指し、平成9年に脱サラし専業農家となった。
- ◆ 当初は、稲作経営を主で行う予定であったが、転作の必要があったため、普及センターからの勧めで転作水田でユリの切り花栽培を始めた。

これまでの課題に対する対応

- ◆ ユリの切り花は、栽培管理が難しく、普及員に相談しながら栽培方法を習得していった。
- ◆ 施設ハウスの室温調整に重油暖房を使用しているため、燃料費が高んでいたが、薪ストーブを併用して暖房費の軽減に繋げ、平成27年からヒートポンプも併用して燃料費の削減に努めている。
- ◆ ユリの切り花は、水はけのよい土壌を好むため、圃場の天地返しやもみ殻を使用して暗渠を施し排水対策を行っている。また、緑肥栽培（ソルゴー）に取り組み土づくりを行っている。
- ◆ ユリの切り花の生産は、年間の祝休日の配置、イベントなどを見据えた年間栽培計画を策定し、ピンポイントで高値の時期に出荷できるように計画的な生産に努めている。
- ◆ 首都圏においては、ユリの切り花の需要が高く、東京の市場へ出荷することで高値で販売することができ、収益向上に繋げている。

今後の展望等

- ◆ 栽培技術レベルを上げて市場が求める良質なユリの切り花を生産したい。
- ◆ 園芸作業は重労働なので、施設機械等の導入により作業を軽減化したい。



栽培中のユリの花

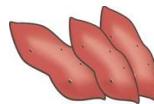


ハウスの暖房設備

園芸作物の栽培品目を見直し年間を通じて平準化した作業体系とし安定収入の確保へ

株式会社平野農園（胎内市）

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 祖父が終戦前まで漁師を営んでいたが、終戦後に漁師を辞め、園芸（葉たばこ、球根栽培）を開始していた。
- ◆ 農業大学を卒業後に、実家や地域の農業を守ることを考え、平成15年に親元就農した。



これまでの課題に対する対応

- ◆ 葉たばこについては、近年の異常気象による高温に伴い、高温障害で栽培管理が難しくなっている。夏場は必要以上にかん水を行わない栽培がスタンダードであったが、高温障害防止のため、かん水のタイミング、散水量を調整して栽培している。
- ◆ 先代が栽培していた園芸作物を継承しつつ、通年の作業体系、栽培品目の見直しを行い、葉たばこ（春～夏）、さつまいも（夏～秋）、だいこん（夏～冬）の栽培とした。このことにより通年の作業体系を平準化し、また、冬場にさつまいもを販売することで冬期間の所得確保に繋げている。
- ◆ 地域の高齢農業者が離農し耕作放棄地が増え、農地を借受け規模拡大していく中、地域の担い手として平成30年に法人化した。

今後の展望等

- ◆ 耕作放棄地を活用し、さつまいも、だいこん等の園芸作物を拡大したい。
- ◆ 現在、自分が中心となり農業機械のオペレーター作業を行っているが、今後は、従業員に対し、農業機械の操作技術の向上を図りながら、ライフワークバランスを取り入れ、従業員の作業分担、全作業体系の見直しを行い、地域の担い手として営農していきたい。



栽培中のさつまいも畑で代表の平野信幸さん

ブランドいちご「越後姫」の栽培技術確立に寄与 販路拡大を推進し、産地発展に貢献

本間 正司（新発田市）

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 昭和58年からいちご栽培をスタート。当時、栽培していた品種は収穫期間が短く、水稻の作業とも重なって負担が大きかった。
- ◆ その後、食味の評価が高く、長い期間収穫できる系統のいちご（後の「越後姫」平成8年品種登録）に将来性を感じ導入を決めた。
- ◆ いちご栽培のほか、1 haの畑で学校給食用向けに、ねぎ、はくさい、だいこん等を栽培している。



本間正司さんと
高設栽培システム

これまでの課題に対する対応

- ◆ いちごは露地育苗を行っていたが、ポット育苗を導入したことにより苗質の改善に繋がった。
- ◆ 収穫作業の労力軽減のため、土耕栽培から高設栽培へ切り替え、作業負担の緩和と同時に着果が安定し収量が増加した。
- ◆ いちごの収量が増えるにつれ、選果選別で手が掛かるようになったことから、稲作を止め、いちごと野菜の栽培に重点を置いた。
- ◆ 新潟県の「越後姫の育ての親」と評価されるようになり、地域のいちご産地の継続的な発展に向け、新規就農を目指す者の研修を受け入れるなど、後継者の育成に努めている。



いちごのランナー



栽培中のいちご苗

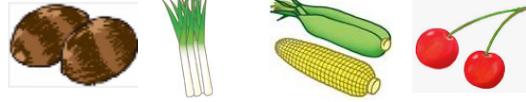
今後の展望等

- ◆ 越後姫は、価格変動があまりないため、収入の計算をしやすく、引き続きいちご栽培を軸とした農業で、いちご栽培の後継者を育成し、楽しみながら末永く営農を続けていきたい。

葉たばこの廃作農地を借受け地域でさといも栽培 「砂里芋」で1億円産地を達成

小林 八寿夫（聖籠町）

主な園芸作物



※イラストはイメージ

園芸作物導入の経緯等

- ◆ 先代から稲作とさくらんぼの複合経営をしていた。県外の落葉果樹農業研修所で果樹栽培を学んだ後、昭和54年に親元就農した。
- ◆ 平成元年にねぎ、とうもろこしを、平成17年にさといもの栽培を開始した。
- ◆ 更に、令和元年には、地域の葉たばこ廃作地（砂丘畑）を借受け、さといも栽培を拡大した。



栽培中の砂利芋と
小林八寿夫さん

これまでの課題に対する対応

- ◆ 地区（JA北越後管内）のさといもの生産者でJA北越後さといも部会（会員20名）を結成し、砂丘畑で栽培するさといもを「砂里芋」と名付けてブランド化し全国へ販売している。現在、さといも部会の部会長を担っている。
- ◆ さといも部会では、砂里芋の出荷は全量JAへ出荷しているが、JAを通じて、（株）イトーヨーカードーの「顔の見える野菜」に登録し販路拡大を図っている。
- ◆ さといも部会全体で令和2年に1億円の販売実績を達成した。
- ◆ 砂里芋は、乾燥するとカルシウム欠乏を起こし生育障害になり品質低下するため、スプリンクラーをこまめに活用し慎重に水管理を行っている。
- ◆ 病害虫対策は、地区全体で徹底し管理に努めている。
- ◆ 年間を通じて収益が得られる複合経営として、収益が得られる品目を選定し、さくらんぼ（5～6月）、とうもろこし（7～8月）、水稲（9～10月）、ねぎ（8～11月）、砂里芋（11～3月）と分散する体系としている。

今後の展望等

- ◆ さといも部会は、砂里芋の品質管理、栽培時の安全確保、販売拡充のためJAと共同でJGAPの第3者認証を令和4年9月の団体取得に向けて目指している。



砂丘畑で育つ砂利芋

（令和4年3月）